



私は低身長

～ありのままの自分を受け入れる大切さ～

入善町立入善西中学校 2年 若島 秋乃

「チビ！」

「どうしてそんなに小さいが？」

今まで何度言われただろうか。その通り、平均に比べて、私は身長がとても低いのだ。母に聞くと、保育所に通所する四歳頃から身長は伸び悩んだそうだ。母は心配し、私を病院へ連れて行った。検査を受けたが異常はなく、医師からは様子を見るように言われたそうだ。

同級生との身長差はどんどん広がり、十五センチ以上になった。とても同じ学年とは思えないくらいだった。小学生になったころから、自分は身長が低いと自覚するようになった。身長が高い友達を羨ましく感じるようになった。体育の時間は特にそうだった。私にとってハードルは腰よりも高く、跳び越えることは到底無理だった。百メートルのゴールは遥か遠くに感じた。跳び箱に至ってはそびえたつ高い山だった。「どうせ自分はできない。ハードルも跳び箱も跳べないし、足だって遅い。」と思うようになり、だんだん自分に自信がなくなっていく。

そのころから、同級生や上級生に「チビ！」とからかわれるようになった。指をさされてクスクスと笑われることもあった。背が低いことを気にしていた私は、からかわれる度にショックを受けていた。

下級生からは、「五年生なのにどうしてそんなに小さいが？」と不思議そうに何度も聞かれたり、「あきちゃんより私のほうが大きい。」と言われたりしたこともあった。無邪気な疑問だったり、自慢だったりしたのかもしれない。でも、つらかった。背が低いことは自分でもよくわかっている。これ以上、私の身長に触れてほしくなかった。

いろいろな人から、同じことを何度も言われて、いろいろな気持ちで心の中はぐちゃぐちゃになり深く傷ついていった。

そんな私の心のよりどころは母だった。母は、いつも私の愚痴を聞いてくれた。学校で言われて傷ついたことを何でも話した。私の話を聞いて慰めてくれた。そして、毎回こう言ってくれた。

「傷ついていてもショックを受けても身長は伸びないから、せめて自分で自分を大

切にできたらいいね。悪気があって言っている人はほんの一部だから、いちいち傷ついていたら損だよ。自分を大切に。」と。でも、なかなか母の言うように思考を変えることはできなかった。

四年生るとき、母の勧めでバドミントンクラブに入団することにした。スポーツが得意ではなくても好きになれたらという気持ちだった。純粋にバドミントンは楽しかった。できなかったことが段々とできるようになり、技術面で向上した。コーチの方たちが声をかけて褒めてくれた。もちろん厳しい指導もあったが、私のことを気にかけて認めてくれる存在ができたのだ。もっと上達したいとやる気が出てきた。そして、何よりもかけがえのない仲間ができた。バドミントンクラブのメンバーは私の身長のことをちっとも気にしなかった。バドミントンが上手になりたいという同じ目標に向かい、ありのままの私を受け入れてくれた。バドミントンを続けていくうちに少しずつ自信がついていった。その頃から、母に言われた言葉の意味が分かるようになった。自分は自分。人の言うことで自信をなくしても仕方がない。私は自分を大切にしよう。そう思えるようになった。

私は中学校に入学した。身長は相変わらず伸び悩んでいる。周りの同級生は身長が高くスラッとしている。それを見ると、大人っぽくて素敵だと羨ましくなった。だけど、「私は私。」心の中で、呪文のように唱えた。入学後、クラスでの自己紹介があった。心臓はドキドキと高鳴り、緊張が高まっていた。私は「チャームポイントは低身長です。」と笑顔で元気よく言った。私の心はずがしかった。クラスメイトは笑ったりからかったりすることなく拍手してくれた。私は嬉しかった。私はこれからも自分を大事にしていこうと思った。

今、自分の見た目に悩んでいる人は世界中に大勢いるだろう。人からの言葉に傷ついたり苦しんだりしている人もたくさんいるだろう。私はそんな人に伝えたい。誰一人同じではない。かけがえのない自分自身の個性を大事にしてほしい。そして、ありのままの自分自身を受け入れ、自分を大切にすることによって、どれだけ幸せになれるかを知ってほしい。

私はこれからも自分の見た目を大事にし、共に強く生きていきたい。そして、世界中が互いの個性を尊重し、認め合える社会になることを願って。